

あの出会いから四百年

◎ 忠興と尊楷が築いた礎

千利休のもとで侘び茶の興義を極めた細川忠興。文禄・慶長の役で招致された李朝陶工・尊楷。この二人の運命的な出会いによって歴史の扉は開かれました。開窯に選ばれた場所は福智山の麓、上野。関ヶ原の戦いで功を挙げ、豊前小倉藩主となった細川忠興（三斎）は、1602年（慶長7年）、この地に尊楷を招いて築窯させます。上野焼の始まりです。尊楷は地名にちなんで上野喜蔵高国と名を改め、利休七哲の一人である「三斎好み」の格調高い茶陶を献上し続けました。細川家（忠興・忠利父子）の豊前統治は31年間と短いものでしたが、この間に上野焼の確固たる礎が築かれたのです。

1632年（寛永9年）、尊楷は藩主の移封（国替え）に従って、肥後熊本へと移ります。その時、子の十時孫左衛門と娘婿の渡久左



原点を踏まえなければ語れない、悠久の時を経て息づく上野の伝統。1602年、小さな火が福智山麓で炎となり、歴史は幕を開けた。

衛門を上野に残しました。この決断が上野焼存続の危機を救い、上野の炎を燃やし続けることにつながります。細川家移封の際には、その善政を慕う多くの領民が共に移ろうとし、その行動を制止する「御触書」が領内に出されたといえます。こうして細川忠興という名君のもとで上野焼を興し、継承させた尊楷は、肥後の地

細川忠興 (三斎) 1563-1646

安土桃山時代から江戸時代前期の武将、大名。丹後宮津城主を経て豊前小倉細川藩初代藩主となる。号は三斎。室町幕府滅亡後は父藤孝（幽斎）とともに織田信長に仕えた。明智光秀の娘、玉（ガラヤ）を妻としたが本能寺の変後は秀吉方につく。関ヶ原の合戦では徳川方に属し、その戦功により豊前・豊後39万9千石を所領した。知勇兼備の名將で、茶湯や文芸に通じ、千利休の高弟として七哲の一人に数えられている。茶道三斎流の祖。（画像：永青文庫所蔵）

◎ 守り抜かれた伝統の炎

でも八代焼（高田焼）を創始します。忠興がこの世を去った直後に、尊楷が自ら扶持（俸禄）を返上して出家したことから、彼がいかに忠興を敬慕していたかがうかがえます。

細川氏にかわって小倉城に入城した小笠原忠貞もまた、文武に優れ、特に茶道に精通した藩主でした。上野焼はこの小笠原家の



もと、藩窯として庇護され、幕末まで守り継がれていきます。やがて明治維新後の廃藩置県で小笠原藩がなくなった後、上野焼は一時的に途絶えたかのように思われましたが、1902年

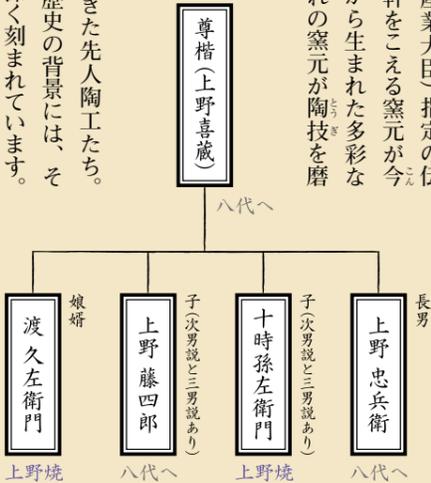
（明治35年）田川郡の補助により、熊谷九八郎によって再興が遂げられました。その後、土と炎に挑む陶芸家たちが続々とこの地に白煙を



小笠原忠貞 1596-1667

豊前小倉小笠原藩の初代藩主。徳川家康のひ孫にあたり、九州探題の任を兼ねていたといわれている。礼法や茶道に通じ、小笠原古流を興した。（画像／広寿山福聚寺所蔵／北九州市立自然史・歴史博物館提供）

立て、上野の炎は完全に再燃されていきます。昭和58年には国（経済産業大臣）指定の伝統的工芸品となり、20軒をこえる窯元が今日まで点在。長い伝統から生まれた多彩な技法を駆使し、それぞれの窯元が陶技を磨き続けています。数々の苦難を乗り越え、心と技を幾世代にもわたって伝えながら、伝統を守り、昇華させてきた先人陶工たち。4百年を越える悠久の歴史の背景には、その計り知れない労が、深く刻まれています。



上野焼を知らない。63% 町内3小学校の高学年生100人に聞きました。

綺麗さびの遠州好み

上野焼は、徳川将軍家茶道指南役の大名家人・小堀遠州が指導した国焼で、遠州好みの茶陶、遠州ゆかりの七窯の一つとして伝えられています。遠州は、千利休、古田織部と続いた茶道の本流を受け継いだ日本三大茶人の一人で「綺麗さび」という華麗で優美な茶風を創り上げました。

遠州ゆかりの七窯

志戸呂焼 / 遠江（静岡）、膳所焼 / 近江（滋賀）、朝日焼 / 山城（京都）、赤膚焼 / 大和（奈良）、古曾部焼 / 摂津（大阪）、上野焼 / 豊前（福岡）、高取焼 / 筑前（福岡県）



小堀遠州 (政一) 1579-1647

近江小室藩主で江戸初期の大名家人。号は孤蓬庵。従五位下遠江守であることから「遠州」の名で呼ばれる。王朝文化の理念と茶道を結びつけた「綺麗さび」の茶風を確立し、茶道具で遠州が鑑定したものを「中興名物」と称される（千利休以前のを「大名物」、利休時代のを「名物」という）。建築や造園にも優れ、その万能さから日本のレオナルド・ダ・ヴィンチとも称されている。（画像：大徳寺孤蓬庵所蔵）

豊前 小倉・上野 1602-

【小倉城】細川忠興入城のころに開窯した上野焼。後にも小笠原家の藩窯となる。

肥後 熊本・八代 1632-

【熊本城】肥後へと移った細川家に従い、尊楷は八代で高田焼を創始する。

尊楷 (上野喜蔵) 1565-1654

八代市にある上野焼開祖・尊楷（上野喜蔵）の墓。忠興（三斎）が亡くなると即座に仏門に入り、宗清と名乗る。1654年、89歳の生涯を閉じた。

半筒茶碗 (銘 ねざめ) 喜蔵作

当時の高僧である清巖宗清の箱書きを残す喜蔵作の貴重な八代茶碗。史料的に喜蔵作と確定できるのはこの茶碗のみ。（出光美術館所蔵）

